

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2013～2016

課題番号：25704012

研究課題名(和文) スカンディナヴィアとその影響圏におけるルーン石碑の総合研究

研究課題名(英文) A study of rune stones and inscriptions in Scandinavia and its related areas

研究代表者

小澤 実(OZAWA, Minoru)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：90467259

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、スカンディナヴィアならびにその関連地域に分布するルーン石碑の社会的機能を中心に検討することで、(1)デンマーク・ノルウェー・スウェーデン三国の歴史的形成過程の比較、(2)スカンディナヴィア影響圏におけるルーン石碑の建立の意味、(3)そのようなルーン石碑のあり方から見たスカンディナヴィア人歴史空間の再構築を試みた。その結果として、ルーン石碑の分布の粗密や形状の多様性は、石碑を建立した在地有力者らの政治的メッセージとして読み解くことが可能であり、そのように読み解いた場合、他地域に比べ富を効果的に蓄積したデンマーク・イエリング王権が優位な立場で展開したと言える。

研究成果の概要(英文)：This research aims at studying (1) the comparison of making-process of the three kingdoms of Denmark, Norway and Sweden, (2) the social meaning of raising of rune stones outside Scandinavia and (3) the reconstruction of political and economic activities of the Scandinavians in a Eurasian perspective through social role of rune stones inside and outside Scandinavia. That results in explaining (a) how rune stones were distributed and shaped reflected political message of the magnates who raised their stones and (b) why the Jelling dynasty dominated political scene in Scandinavia and in Northern Europe.

研究分野：北欧中世史

キーワード：ヴァイキング ルーン石碑 スカンディナヴィア デンマーク ノルウェー スウェーデン イエリング王権 ビザンツ帝国

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、イングランド・ドイツ・フランスの発展を中心に記述する従来の中世ヨーロッパ観を根本的に書き換える作業の一環として、北の辺境と認識されるスカンディナヴィア世界(デンマーク・ノルウェー・スウェーデンとその影響圏)の展開に注目し、この歴史的地域が有する独自性とその周辺世界との交渉の分析を軸に研究を進めてきた。一方では、研究文献を解読するために英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、北欧諸語を習得し、他方では史料言語であるラテン語、古英語、古アイスランド語を駆使することで当該地域の歴史像の再構築に取り組んだ。研究代表者は、その過程において、ルーン石碑と呼ばれる歴史史料の存在を確認した。

ルーン石碑とは、紀元千年前後のスカンディナヴィア世界において集中的に建立された死者記念碑である。現在合計 3000 基ほどが確認されているこの石碑テキストは、ルーン文字というゲルマン世界特有の文字で刻まれている。そのため以前より言語学者の注意は引いてきたが、テキスト自体が短いこともあって歴史家がこれを歴史史料として用いることはほとんどなかった。しかしながら研究代表者は、このルーン石碑には他の歴史史料では得られない情報を伝達する価値があることを予想し、若手研究 B「ルーン石碑の社会的機能に関する基礎的研究」ならびに立教大学 SFR「近世ルーン学テキストに関する基礎的研究」において、まずはこのルーン石碑を歴史史料として用いる方法論を確立し、その方法論を応用して新しい歴史的事実の発見に努めてきた。その結果として次に述べるような結論を得つつあった。

(1) ルーン石碑は、単なる死者記念碑ではなく、建立者のもつリソースに従い、そこに刻まれるテキスト、背景図像、石碑そのものの形状、設置される場所が変化する、他者を意識した政治的表徴である。

(2) ルーン石碑は、一見類似したテキストや形状をしていたとしても、石碑が建立された歴史的環境つまりコンテキストによって、その機能は異なる。

(3) (1) で述べたように政治的表徴であるルーン石碑は、そこに刻まれている政治的主張を、現地コミュニティに記憶させ、また現地語を理解できない外来集団に視覚的に印象づける機能を持っている。とりわけこの機能は、10 世紀後半のデンマーク王ハーラル青歯王が建立したイエリング石碑において確認できる。

(4) 現存するルーン石碑の残存状況を精査した結果、紀元千年当時は、現在伝来する石碑よりも遙かに多くのルーン石碑が建立さ

れていたことが予想される。以上の結論のうち(1)と(2)はルーン石碑を歴史史料としてあつかうための方法論にかかわる成果であり、他方で(3)と(4)はその方法論を応用して得られた歴史的事実である。いずれも従来の欧米の研究史において指摘されてこなかった研究代表者独自の成果であり、研究代表者は、その成果を世界の研究者コミュニティに伝えるために英語によって国際学会ならびに専門誌で積極的に報告してきた。

2. 研究の目的

以上整理したように、研究代表者はルーン石碑の歴史的分析手法を確立し、それを用いて知見を獲得しつつあるが、実のところ、上記成果はデンマークという狭い範囲での調査に限定することで導き出されたものである。しかしこの限定には積極的な理由がある。それは、デンマークで確認されるルーン石碑は 200 程度であり、その程度の数であれば個人でもすべての石碑を徹底的に調査することが可能であったからである。今回の研究にあたって研究代表者は、デンマークでの調査で得られた上記方法論を、現在確認できるルーン石碑全体に適用することで、以下の三点を明らかにする。

(1) デンマーク・ノルウェー・スウェーデン三国の比較

すでに述べたように、ルーン石碑は紀元千年前後のスカンディナヴィア世界において集中的に建立された。しかしながらデンマーク・ノルウェー・スウェーデンで発見された石碑の数は、それぞれおよそ 200 : 50 : 2500 と著しい対照をなす。このような石碑数の不均衡の背景には各地域の歴史的環境の差異があると思われる。まずはノルウェーとスウェーデンにおけるルーン石碑の特徴と傾向を明かとし、しかるのちに三国におけるルーン石碑の差異を比較することで、その差異がどのような原因に基づくものなのか明らかにする。

(2) スカンディナヴィア影響圏におけるルーン石碑の分布

ルーン石碑は、現在のスカンディナヴィア三国で集中的に建立されたが、実はスカンディナヴィア人が居留した海外地域においてもまた実際に伝来し、もしくは建立されたことが示唆される証拠を残している。たとえばグリーンランドのルーン碑文、ロンドンのセント・ポール大聖堂の礎石、もともとギリシアに建立されていたヴェネツィアの石碑、そして黒海沿岸部のベレザン石碑などであり、実のところ、グリーンランドからユーラシア西部に至るまで、広範囲にわたりルーン石碑を建立する文化は存在したのである。従来こ

これらの石碑は孤立例として研究者の興味を引いてこなかったが、すでに述べたように、現在伝来しているものより遙かに多くのルーン石碑が作製されていたことが研究代表者の研究により明らかとなりつつあったため、まずはスカンディナヴィア世界以外のルーン石碑・碑文の残存状況を整理し、しかるのちにこうした孤立事例のそれぞれが持つ特有の現地歴史的環境を復元し、スカンディナヴィア本国との比較を試みる基礎情報を得る。

(3) ルーン石碑から見たスカンディナヴィア歴史空間の再構築

(1) ではルーン石碑の本場であるスカンディナヴィア世界を、(2) ではスカンディナヴィア人が拡大居住したスカンディナヴィア影響圏を対象とすることでデータを収集した。このデータを基に、それぞれの地域が持つ歴史的特性を加味した上で石碑それ自体とその機能の比較を試み、グリーンランドからユーラシア西部に分布するルーン石碑全体の特徴を明らかにし、最終的に、ルーン石碑という特殊スカンディナヴィア的な歴史史料を通じて、スカンディナヴィア人が展開した歴史空間とはどのような特性を持った空間であり、そこでスカンディナヴィア人がどのような役割を果たしたのかを明らかにする。その際には、研究代表者がルーン石碑の分析とともに研究を進めていた前近代ユーラシア論の蓄積が反映されるだろうと考えた。

3. 研究の方法

すでに述べたように研究代表者は、デンマークをケースとして調査を行った結果、ルーン石碑を分析する手法を確立している。したがって、本研究において研究代表者がまず行うべきは、(1) デンマーク以外のスカンディナヴィア世界とその拡大空間におけるルーン石碑の基礎情報(テキスト情報)を収集することであり、しかるのちに、(2) それぞれの地域における歴史地理的特性を再現し(コンテキスト情報)、そのなかに(1)のテキスト状況を位置づけることである。かようなプロセスを経て、現存する3000基のルーン石碑を、地域ごとに比較する基礎ができると考えた。以下、(1)と(2)の研究内容について詳述する。

(1) テキスト情報

研究代表者は研究開始時点でルーン石碑の校訂テキストそのもの(Danmarks Runeindskrifter, Norges yngre Innskifter, Sveriges Runeindskrifterなど)を入手しているため、テキスト情報を得るためには基本的にこれらに基づけばよい。しかしながら研究代表者が必要とするテキスト以外のル

ーン石碑相互間の差異化要素、つまり、支持体である石の形質、ルーンの書体、背景に描かれた図像、ルーンが建立された位置等に関わる情報は、従来の校訂テキストのなかには記載されていないため、あらためて取得しなければならない。そのためには、とりわけ特徴的な石碑をサンプル化してできる限り現地での踏査作業を行い、写真撮影も含めて、石碑建立地の地理的ならびに地誌的情報を収集する。

また、現在失われてしまった石碑に関しては、近世から近代にかけて、16世紀のオーレ・ヴォームやヨハンネス・プレウスら歴代のルーン学者が著したルーン学に関する印行本にしばしば記載されている。これらの印行本は批判的校訂版がいまなお刊行されておらず、グーグルブックスほか、デンマーク国立図書館、コペンハーゲン大学付属アールニ・マグヌッソン研究所、スウェーデン国立図書館といったルーン研究の中心地で現物を参観する必要もある。これらの近世資料については徐々に収集しつつあるが、海外の図書館にマイクロフィルム化を依頼することにより、体系的に収集を行った。

(2) コンテキスト情報

以上のようなテキスト情報に加えて、ルーン石碑の機能を正確に理解するためには、そのルーン石碑が建立され機能した歴史的環境を再現しなければならない。これはつまり、紀元千年前後のスカンディナヴィア世界とその影響圏に関する歴史学的研究である。すでにこれまでの研究で研究代表者は、デンマークをケーススタディとして同時代の歴史環境を復元し、従来のデンマーク観を根本的に捉え直す成果を得てきたが、今回は地域間比較を進めるために、デンマークで試みたものと同様の手法を、スカンディナヴィアの他の地域であるノルウェーならびにスウェーデン、そしてスカンディナヴィア人の拡大地域であるブリテン諸島、北大西洋島嶼部、大陸ヨーロッパ、ロシア、ビザンツ帝国そして東方イスラーム圏にまで拡大する。

4. 研究成果

4年間の研究成果を、当初設定した研究目的に即して三点にまとめる。

(1) デンマーク・ノルウェー・スウェーデン三国の比較

研究代表者は、本研究の前身である若手研究Bではデンマークに限定していたルーン石碑の分析を、本研究ではノルウェーならびにスウェーデンにも拡大し、スカンディナヴィア全体での石碑の状況を整理の上、探求した。一点一点データを取り、データベース化する作業は研究期間を通じて継続的に続ける一方、そこで得られたデータを用いて、適宜研

究報告を行った。

その結果として、しばしば類似の国家形成を進めたと考えられがちなスカンディナヴィア3国はそれぞれ独自の歴史展開を経験していたことが理解された。とりわけデンマークは、他の2国と比べ、いちはやくらテン・カトリック世界からの情報を吸収することによって、北海世界に覇権を唱える強大なイエリング王朝が成立したことを論じた。その際、このイエリング王朝は、「差異化のモニュメント」や「How many rune stones Swein Forkbeard raised?」で論じたように、王権がルーン石碑を統治のために積極的に利用していたことが明らかになりつつある。

(2) スカンディナヴィア影響圏におけるルーン石碑の分布

研究代表者は、イングランド、アイルランド、アイスランド、ドイツにおけるルーン碑文の刊本やその他の地域で発見されたルーン碑文のテキスト情報を入手し、(1)のスカンディナヴィア本国の分布傾向と比較しながら分析を進めた。

研究代表者が注目したのは、各地域におけるヒストリオグラフィーと史料残存状況である。従来の研究では、ルーンテキストが地域ごとに別個に刊行され、研究も特定地域の石碑のみをとりあげて論じてきた。しかし本研究において、スカンディナヴィア人の拡大地域全体を検討したことにより、全体の傾向を把握することが可能になった。

その結果として、スカンディナヴィア本国の調査だけでは理解することができなかったであろうルーン石碑の機能や建立条件についての示唆が得られつつある。最も顕著な事例はアイスランドである「Were rune stones raised in Iceland?」で論じたように、アイスランド人はルーン石碑の建立慣習を知っていたにもかかわらず、ただの一件も石碑を残していない。これはおそらく石碑そのものが建立されなかったからであり、その理由は、アイスランド社会において、ルーン石碑とは別の方法で過去の記憶や権力の誇示を行っていたからであることが想定される。スカンディナヴィア人の社会記憶のあり方を再現するにあたって、貴重な示唆が得られた。

(3) ルーン石碑から見たスカンディナヴィア歴史空間の再構築

研究代表者は、北ヨーロッパ全域に広がるルーン石碑の社会機能を再構成するために、その石碑が建立された背景社会のあり方を、スカンディナヴィア人の活動を通じて復元した。

「海域世界としてのヨーロッパ」では、従来陸の世界と無意識に理解されてきたヨーロッパ世界を海域世界として措定すること

で、海域で優位に立ちうるスカンディナヴィア人がなぜヴァイキングとして9世紀から11世紀の北ヨーロッパにおいて大きな役割を果たしたのかを論じた。「交渉するヴァイキング商人 10世紀におけるビザンツ帝国とルーシの交易協定の検討から」ではビザンツ帝国との間に経済ネットワークを形成するスカンディナヴィア人を、「キエフ・ルーシ形成期における北西ユーラシア世界とスカンディナヴィア」ではルーシとの間に政治的ネットワークを構築するスカンディナヴィア集団の存在を想定した。こうした研究を通じて、北大西洋世界からユーラシア西部にいたる世界の、とりわけ経済的一体性を構成し、従来よりもはるかに誇大なスカンディナヴィア人の活動空間を想定した。また、そうしたネットワークを前提とした「ブリテン、北欧、ユーラシア：クヌート海上王国成立の背景」では、スヴェン王によるイングランド征服ならびにクヌート王による北海世界の支配と統治にとって、ユーラシアネットワークが提供する経済リソースが不可欠であったことを論じた。

研究代表者は以上の結果を、海外の学会や国際ワークショップなどで積極的に報告した。その結果として、海外研究者との連携が深まり、研究成果の国際学会への波及が予想以上に進展した。本研究テーマは、2016年度に開始した国際共同研究加速基金(国際共同研究)に、本研究で培った人脈と成果とともに引き継がれる。

他方で、研究報告や論文で得られた成果は、一般向けの講演や啓蒙書にも反映させ、専門知識の一般還元もはかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計28件)

小澤実、高校世界史教科書と中世ヨーロッパ：時代区分・舞台設定・グローバルヒストリー、じっしやう地歴・公民、査読無、82号、2016、pp. 1-8

小澤実、国際ワークショップ「Old Icelandic Text in Medieval Northern Europe」を終えて：ワークショップの記録と今後、立教大学日本学研究所年報、12巻、査読無、2014、pp. 93-105

[学会発表](計20件)

小澤実、差異化のモニュメント：デンマークのキリスト教化とイエリング王権、REN研、青山学院大学(東京都・渋谷区)、2017年3月17日

OZAWA, Minoru, Remembering the East in Late Viking Age Scandinavia: Social

Function of Rune Stones on Byzantium, International Workshop: Decoding the Historical Sources on Byzantium、立教大学(東京都・豊島区)2016年7月23日

小澤実、ブリテン、北欧、ユーラシア：クヌート海上王国成立の背景、日本中世英語英文学会東支部第32回研究発表会、駒澤大学(東京都・世田谷区)、2016年6月18日

小澤実、海域世界としてのヨーロッパ、バルト・スカンディナヴィア研究会例会、早稲田大学(東京都・新宿区)、2016年1月23日

OZAWA, Minoru, How many rune stones Swein Forkbeard raised?: a contribution to reconstructing the commemoration strategy of the Jelling dynasty, Reading Runes: Discovery, Decipherment, Documentation. The 8th International Symposium on Runes and Runic Inscriptions, Nykoping(Sweden) 2014年9月5日

OZAWA, Minoru, Were rune stones raised in Iceland? An attempt at historical interpretation, Old Icelandic Text in Medieval Northern Europe, Rikkyo University(東京都・豊島区) 2013年11月25日

〔図書〕(計9件)

小澤実他、明石書店、アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章(エリア・スタディーズ140)、2016、pp.441(3-10,48-94,144-146,331-333)

小澤実他、北海道大学出版会、北西ユーラシアの歴史空間 前近代ロシアと周辺世界、2016、pp.336(1-15,75-103)

小澤実他、ミネルヴァ書房、新しく学ぶ西洋の歴史：アジアから考える、2016、pp.450(17-18)

OZAWA, Minoru et al., Edition de Boccard Entre texte et histoire. Études d'histoire médiévale offertes au professeur Shoichi Sato, Préface de Pierre Toubert, 2015, pp.426(265-273)

小澤実他、悠書館、北海・バルト海の商業世界、2015、pp.475(113-148)

小澤実他、慶應義塾大学出版会、十二世紀宗教改革 修道制の刷新と西洋中世社会、2014、pp.712(423-437)

小澤実他、中央公論新社、知のミクロコスモス 中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー、2014、pp.398(1-7,69-97)

OZAWA, Minoru et al., Private, Proceedings of the International Workshop "Old Icelandic Texts in Medieval Northern Europe", 2014, pp.85(35-40)

(1)研究代表者

小澤 実(OZAWA, Minoru)

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：90467259

(4)研究協力者

成川 岳大(NARIKAWA, Takahiro)

菊地 重仁(KIKUCHI, Shigeto)

橋川 裕之(HASHIKAWA, Hiroyuki)

橋爪 烈(HASHIZUME, Retsu)

村田 光司(MURATA, Koji)